

志和峰

し わ み ね



東

又・本堂交差点を東へ。東又郵便局を過ぎ、分かれ道を右手(県道326号)に行き志和に向かう。人家が見えなくなり、山間のいくつかのカーブを曲がると長くてゆるやかな上りの直線が始まる。ここから志和峰地区である。直線の始まりからおよそ2kmのところが志和峠。ここから下れば志和である。志和峠のバス停前には、地区の氏神様である志和峰神社がある。

地区の一番奥は、志和峰(峯)神社の手前を左に600mほど進んだところ。そこで行き止まりとなる。志和峰は、志和峰川に沿って拓けた東西に細長い集落である。江戸期に藩主山内豊房の命によって緒方宗哲という人がまとめた「土佐国州郡志」によれば、縦(東西)二十七町・横(南北)三町とあり、人口は80人近くであったようである。この細長くゆるやかな坂の集落には、現在25世帯50人が暮らしている。

江戸中期・元禄地払帳という米作状況を記した記録簿には、志和峰地区の北側に連なる山を越えたところに位置する飯ノ川村の分と併せて石高などが記されている。志和峰を領知(領地)や知行としていた武士が3〜4人ほどいたようであるが、当時飯ノ川村も同じ武士たちが領有していたものと思われる。ところで、地区の方に伺ったところ、



志和峰川に沿ってひっそりとあるビオトープ

ろ、地区の西の端から東の端にあたる志和峠にかけてのゆるやかな上りは、そのままゆるやかな気候の違いとなるのだそうだ。これから迎える冬には、標高が上がるにつれ寒さも厳しくなるのではないかと思つた。つまり、地区を上りきった東の端の志和峰神社あたりがもっとも寒いのではないかと想像したのである。ところがよく聞いてみると、その逆であるらしい。東に行くにしたがつて標高は上がるが、同時に海に近づくことになるので、南からのあたたかい海風を受けて霜も降りにくいのだという。

さて、戦国期の記録では、志和峰村には「天徳庵」という寺があったようであるが、江戸時代に他の土地に移り小堂だけが残ったという。現在は、天津彦根命(あまつひこねのみこと)を祀る志和峰(峯)神社だけが残っているが、この神社も近代になって現在の場所に移されたのだという。

町のうごき

(10月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	8,442	-9	男 3	16	14	10
女	9,441	-2	女 4	10	19	15
計	17,883	-11	計 7	26	33	25
世帯数	8,642	6	(10月中の届出)			
窪川地域	12,540人	大正地域	2,562人	十和地域	2,781人	

四万十川の 水質状況

	適正值(mg/l)	11月1日
リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	0.201
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.7
化学的酸素要求量	≤ 10.0	6.501

調査：大正(吾川)
資料：四万十高校自然環境部